

高取の考古学Ⅲ

速報—高取の発掘調査最前線 2015



森ヲチヲサ遺跡



市尾瓦窯跡



史跡 与楽カンジヨ古墳

平成 28 年 3 月
高取町教育委員会



最前線 2015 のスタッフ

はじめに

平成 26 年 10 月から 27 年 12 月までの間、高取町教育委員会が実施した発掘調査や試掘調査の中で、市尾瓦窯跡、薩摩遺跡 12 次調査、森ヲチヲサ遺跡、史跡与楽カンジョ古墳の 4 ヶ所の調査成果を速報で紹介します。市尾瓦窯跡は 26 年 12 月に森ヲチヲサ遺跡は 27 年 8 月の現地説明会で冬の雨の中や猛暑の中にそれぞれ 350 名と 500 名の参加者に来ていただきました。この遺跡以外の特に成果があった調査と、説明会后にわかった新事実を含め特別展を企画しました。どうぞ、ごゆっくりご観覧いただき高取町の文化財行政へのご理解とご協力をいただければ幸いです。 高取町教育委員会

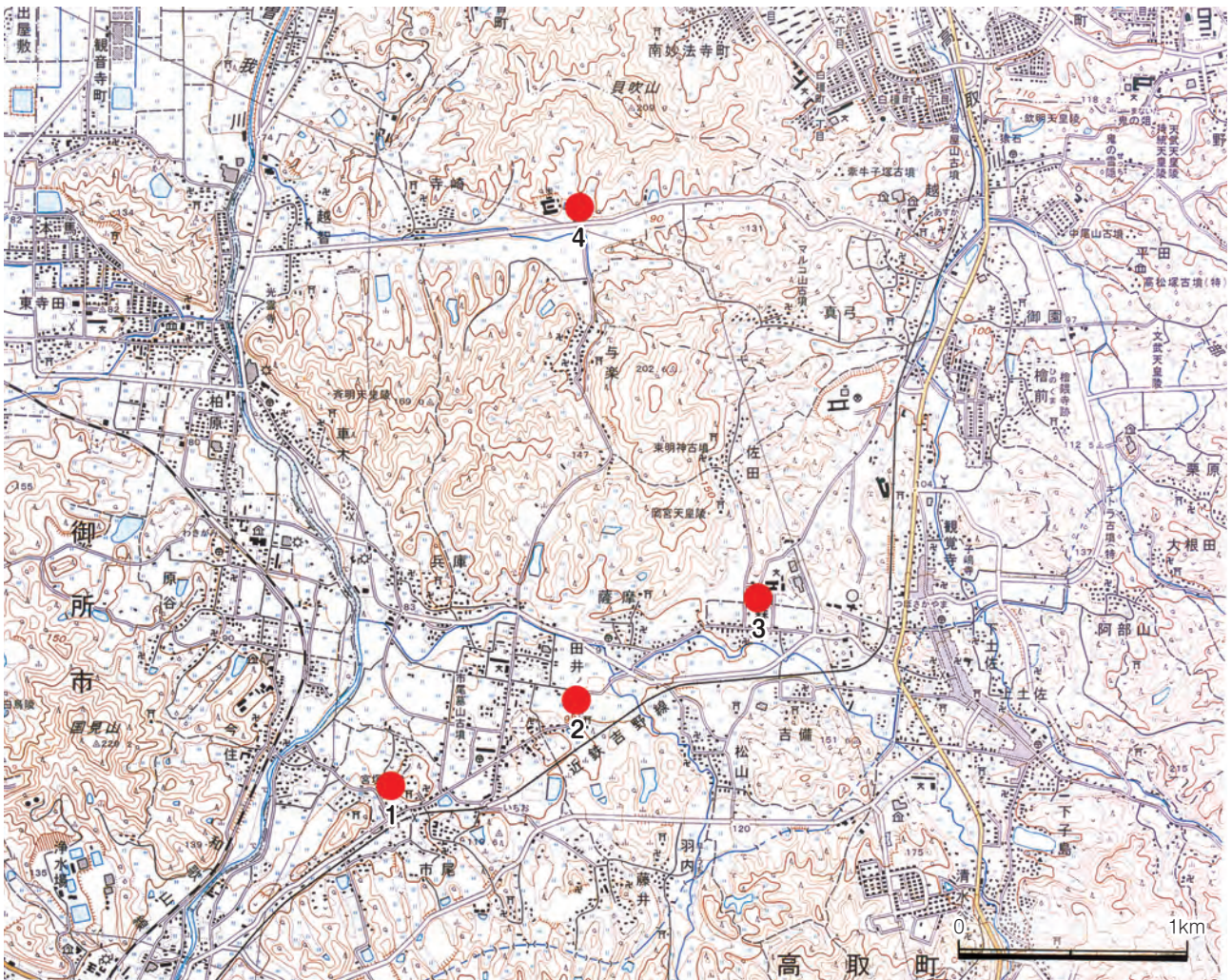


図 1 高取の考古学掲載遺跡位置図
(国土地理院発行地形図に一部加筆)

1. 市尾瓦窯跡
2. 薩摩遺跡 12 次調査
3. 森ヲチヲサ遺跡
4. 史跡 与楽カンジョ古墳

いち お が ようあと 1. 市尾瓦窯跡（高台瓦窯跡）

高取町市尾

高取町市尾の市尾瓦窯跡（高台瓦窯跡）は古くから藤原宮所用の瓦窯跡があったと伝わり、出土瓦や丘陵の踏査といった研究は奈良文化財研究所が中心になり行われてきたが詳細がわからない幻の窯跡であった。市尾瓦窯跡のある天満丘陵を土地所有者や地元大字の協力を得て高取町教育委員会が平成 24 年度から発掘調査を実施している。

調査では、丘陵上に設けた南北 8m、東西 2m のトレンチの東側にある伐採した木の根付近から熱を受けて赤く変色した直径約 20cm の土壌と平瓦片が見つかった。トレンチを拡張して掘り下げると東西の幅約 3m の赤く変色した地面が表れ、丘陵上面からの傾斜を利用して築かれたかまぼこ状の盛り上がり瓦窯跡であることを確認した。

瓦窯跡の全長 6m 幅 1.3m を測る登り窯で、西側から焚口、燃烧室、焼成室、煙道、煙突からなる。地山の花崗岩をトンネル状に削り抜いて、その内部に硬く固めた粘土ブロックをアーチ状に積んで炉壁を構築している。炉壁の天井や裏込めには版築によって強く叩き占められた粘土を被せていた。また、窯内部に雨水などが入らないように窯の周囲に最大幅 50cm を測る素掘りの溝が掘られていた。窯底面に火の回りを良くするためか、敷いた丸瓦を等間隔に置いた階段を設けている。

窯内から軒丸瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦や磚などが出土した。放置した瓦と崩した窯体の上面に窯終了に供えられた馬歯（馬の下顎）を検出した。

燃烧室から 6273 型式の軒丸瓦が出土した。この型式の瓦は、藤原宮大極殿に使われた屋瓦と同型式である。このことから市尾瓦窯が藤原宮の所要瓦を生産していたことが確実となり、瓦窯の操業は 7 世紀後半の藤原京造宮の時期と考えられる。

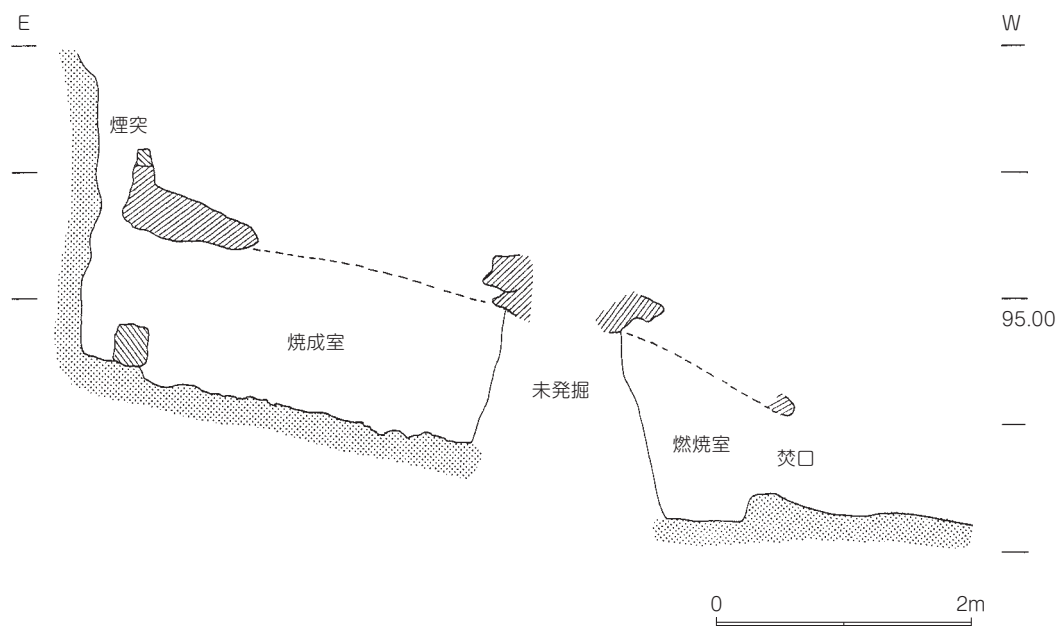


図 2 瓦窯跡断面図



上部の排水溝



煙突



市尾瓦窯跡 (西から)



焼成室奥壁



焼成室と瓦



焼成室の軒丸瓦



焼成室・焚口天井 (南から)

さつ ま い せ き 2. 薩摩遺跡 12 次調査

高取町田井庄

県道五條高取線の拡幅に伴い大字田井庄の水田跡(270㎡)の発掘調査を実施した。

調査地の南側を1トレンチとして、南北の長さ40m、東西の幅5mのトレンチを設定した。表土および耕作土約40cmをバックフォーで掘削し、表面を精査すると素掘溝を検出した。その下層を掘削すると幅8mを測る暗灰色粘質土が堆積する溝状の遺構を確認した。遺構を掘削すると、堆積の一部に砂質土が含まれ粘土と粘質土が互層に堆積から旧河道と判断した。また、表土から1.3m掘削された溝底部には自然木を杭状に打ち込んだ箇所も確認した。この堆積土からは多量の土器、遺物収集箱(コンテナ)20箱分が出土した。土器の多くは古墳時代前期の土器と考えられる。トレンチ北端から3m地点で土壌を検出した(土壌1)。土壌1は80~90cm四方の方形で、検出時の深さは30cmを測る。断面の形態は箱状を呈し、土壌内からコンテナ1箱分の古墳時代前期の土器が出土した。また北端から8mの地点の西端部に直径2mを測る円形の土壌を検出した(土壌2)。



土壌1(遺構検出)



土壌1(土器出土状況)

2トレンチは、1トレンチから北へ8mの地点に位置する。南北の長さ20m、東西の幅5mのトレンチを設定した。1トレンチ同様の南北方向の素掘溝を検出した。素掘溝は1トレンチと比べ密である。下層遺構を精査するとトレンチの北東から南西へ幅2mを測る溝を検出した(溝1)。溝の深さは浅く20cmを測り、断面の形態は台形を呈している。溝1の南側に幅30cmを測るL字形の溝を検出した(溝2)。溝2はトレンチの南西から北東へ5m斜行した地点で直角に北西へ屈曲し2mの地点で溝1に削平されている。溝2内に多くの柱穴の痕跡を検出した。また西端から80cmの地点で一端途切れている。溝は検出状況などから大壁建物の遺構と考えられる(大壁建物1)。

トレンチ北側中央に長さ9m、幅30~40cmを測るL字形の溝を検出した。溝はトレンチの西端から東へ3m地点で北へ直角に屈曲し9m続きトレンチ外へ継続している。このL字溝の北側に溝から西へ派生する同様の溝2箇所を確認した。断割りの結果、溝が重複していることが明らかになり、また溝内に多くの柱穴が確認されたことから大壁建物の遺構と考えられる(大壁建物2・3)。

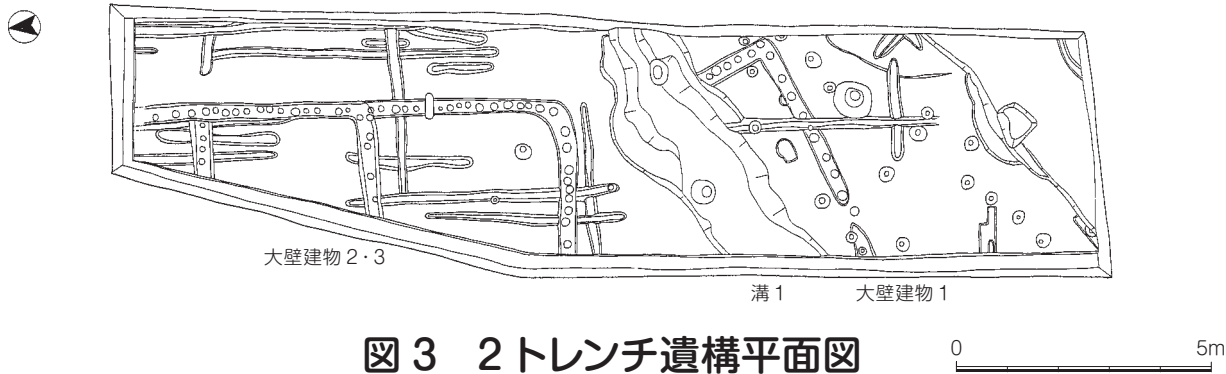


図3 2トレンチ遺構平面図

溝1から飛鳥時代の須恵器片が出土している。大壁建物周辺の遺物包含層から古墳時代前期～後期の土器片がコンテナ2箱分出土している。

第2トレンチの溝1は区画溝と考えられ、南北主軸に斜行する古代以降の何らかの施設に伴う溝である。大壁建物は第12次調査で部分的であるが3棟が確認された。3棟のなかで大壁建物2は大壁建物3の遺構で再掘削を受け、途切れているが復元すると南北8m東西3m以上を測る。建物の時期は、出土遺物を含め検討が必要であるが検出状況から6世紀後半～7世紀前半頃と考えられる。

また、大壁建物の基礎部分は古墳時代前期の旧河道を、硬化させた黒色の粘質土で厚さ25cm以上の整地を施していた。整地土は旧河道や周辺に堆積していた土師器や須恵器など含む土器が多く混ざった土が叩き締められた状態であった。軟弱な土地に建てられた大壁建物の基礎構造がわかる良好な資料となった。



調査地 (北から)



大壁建物 1



大壁建物 2・3



土器片を含む整地土

3. 森ヲチヲサ遺跡

高取町森

町立学校給食センター建設に伴い高取町森の高取中学校南西にある水田跡 550㎡の発掘調査を実施した。

水田及び畑跡 5ヶ所を重機で試掘した結果、南端の1段高くなった畑の下層から遺構や遺物が見つかりトレンチを拡張して本調査を行った。

調査の結果、トレンチから3棟以上の大壁建物を検出した。大壁建物は周囲に四角い溝を掘り、溝内に柱を建て並べ柱ごと土等で埋め込み分厚い壁を構築する建物で、古墳時代中期の5世紀に韓半島の百済や伽耶地域から渡来人とともに日本に伝わりました。現在で言うと土蔵のような造りの建物で復元模型を歴史研修センターに展示しています。大壁建物は高取町は清水谷遺跡・観音寺遺跡・市尾遺跡・薩摩遺跡などから検出しています。森ヲチヲサ遺跡の大壁建物1は1辺13.5mを測る正方形を呈し、幅50cm、現状の深さ30cmの箱型の溝内に、直径20cmを測る円形の柱穴の痕跡が並んで検出した。実際に壁や柱は見つかりませんでした。壁溝を断割ると時間が経ち、朽ちて腐り土になった痕跡を検出しました。大壁建物の東辺に約2mの壁が途切れた所があり、その部分は建物の出入口かも知れません。

また、建物南西部から土器がまとまって出土した。土器は須恵器の器台と土師器の高杯・甕・鉢・製塩土器などがあります。壁溝から滑石製勾玉、建物包含層から鉄鏃が出土しました。大壁建物は2棟以上重複しており、大壁建物1は出土遺物から3棟で最後の5世紀後半に建てられたと考えています。



大壁建物1 壁溝断ち割り



大壁建物1



大壁建物模型（歴史研修センター）



土器出土状況

大壁建物 1 の内部に 11 個の大型柱穴を検出した。柱穴の掘形は直径 60 ～ 70cm を測り円形を呈しています。柱の痕跡は断面観察から約 20cm と考えられます。大壁建物には重複があり、いつの建物に伴うものか分かりませんが 1 辺が 10m を超えるような建物の屋根を支える柱穴には変わりなく大壁建物の内部に 3 間 × 2 間 (東西 10m 南北 8m) の規模をもつ柱穴列が明らかになりました。

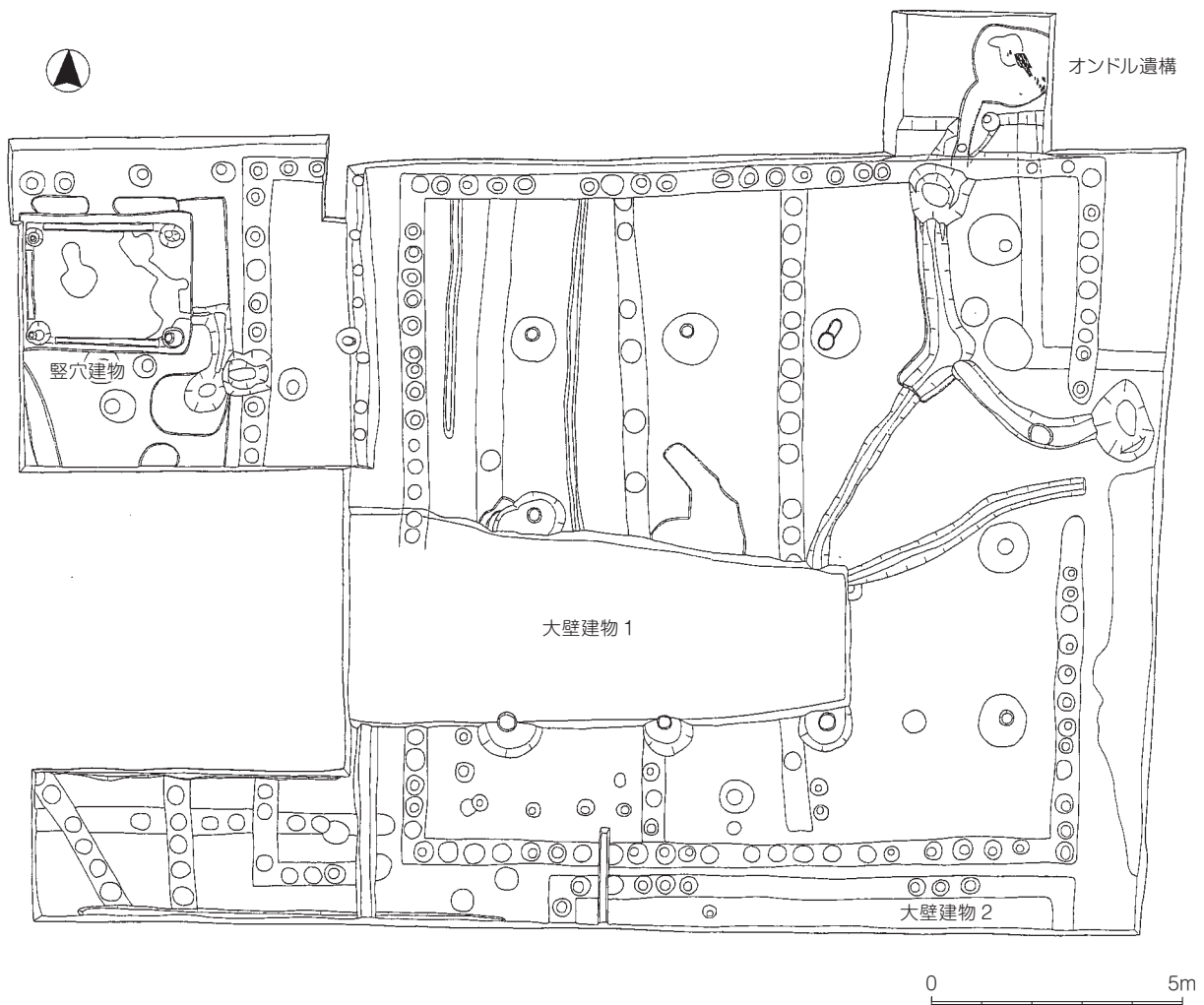


図 4 森ヲチヲサ遺跡遺構 平面図



建物柱穴断割り



大壁建物と大型柱穴

大壁建物1からオンドル（床下暖房）を検出しました。オンドルは床下に有り、下層を断割らないと確認できませんが、床の残りが悪く遺構検出時に炭が混入した粘質土が溝状に堆積したことから煙道と仮定して、溝を追跡し煙出しと焚口を確認した。オンドルの焚口は大壁建物1の北東に高温でオレンジ色に変色した土壌と炭化材と炭層が見つかり、そこから弓状の屈曲した約10mの煙道の端、大壁建物1の東側に深く掘られた円形土壌と土壌北側の炭層堆積から煙出しと判断しました。全国的にも検出例はほとんどなく、高取町では清水谷遺跡・観覚寺遺跡・森カシ谷遺跡の大壁建物に伴い、他は滋賀県大津市の穴太遺跡でしか確認されていない希有の遺構で、今後の検討が必要な大変貴重なものです。



オンドル焚口



オンドル遺構

し せき しょう らく か ん じ ょ こ ぶん 4. 史跡与楽カンジョ古墳

高取町与楽

与楽カンジョ古墳は、与楽罐子塚古墳、寺崎白壁塚古墳ともに平成 25 年に国指定史跡になりました。与楽カンジョ古墳の墳丘崩壊を食い止めることと石室の公開を目指した整備事業を実施することになり、カンジョ古墳羨道部分の再発掘と閉塞石の除去を目的とした発掘調査を実施した。調査面積は 25㎡である。

閉塞石を除去すると羨道床面の礫敷上に破砕された須恵器の杯破片が数点出土し、以前の調査から出土した破片と一致した。出土状況から埋葬時に土器を意図的に割り上面に閉塞石を載せたと考えられる。また、礫敷が途切れた部分の下層の地山に U 字形の掘り込みがあり、断面を観察すると花崗岩の地山と黒色の粘土が互層に積まれた堆積が見られた。この掘り込みは通称「墓道」と言われ、石室や墳丘構築時の作業面や埋葬時の通路面と解釈されている。今回の調査で出土した須恵器杯は 8 世紀前半で、カンジョ古墳築造の 7 世紀前半から約 100 年の間、古墳の埋葬（追葬）が続いていたと思われる。



除去前の閉塞石



破砕された須恵器



墓道



市尾瓦窯跡の軒丸瓦 (奇跡の1枚)